

平成23年度 熊本大学政策創造研究教育センター
地域マネジメント政策フォーラム

—人と社会はこれで動く—

エンターテインメントと教育の融合

講演録

講演

行動と社会変化のための
エンターテインメント・エデュケーション戦略

講演 アービンド・シングハル 氏
2011年12月13日(火)

— 人と社会はこれで動く —

エンターテインメントと教育の融合

○司会 定刻になりましたので、ただ今より、平成23年度、熊本大学政策創造研究教育センター地域マネジメント政策フォーラム「—人と社会はこれで動く—エンターテインメントと教育の融合」を始めさせていただきます。

シングハル先生のご講演に先立ちまして、熊本大学政策創造研究教育センター教授、上野眞也よりごあいさつさせていただきます。

○上野 皆さん、おはようございます。今日は早朝から私どもの政策フォーラムにお越しいただきまして、大変ありがとうございました。昨日は防災の政策フォーラムを開催いたしました。今日はアメリカからシングハル先生をお呼びし、新しい社会、あるいは組織をつくっていく取り組みについての話を伺う機会を持つて、私どもはとても幸せに思っております。また、たくさんの市民の方、学生の皆さん方にご参加いただけますことを、大変ありがたく思っております。

私どもの政策フォーラムは、6年前に政策創造研究教育センターを設立したときから開催させていただいております。熊本大学では、さまざまな地域から国際的な課題についての研究を進めており、いろいろな問題解決に当たった技術開発や知識、あるいはそういうものに取り組む人材の養成などをしていますが、私たちは政策創造研究教育センターをこういうものを社会に還元する、と言うとちょっとおべんちゃら目線かもしれませんが、社会の中に回していく役割を果たしたいということでつくりました。これまでも熊本のさまざまな課題について、取り組まさせていただきましたが、さらにシングハル先生のされているような取り組みを学びながら、私たちももっと飛躍できればと思っております。

実は、昨日からシングハル先生のセミナーに参加

させていただき、食事を一緒にさせていただきながら、お話を伺ってまいりました。後で、これを企画しました河村洋子准教授から詳しくご紹介があるかと思いますが、シングハル先生はもともとインドのお生まれで、青年時代までインドでお育ちになり、現在はアメリカで活躍されているということでした。

お話の中では、例えば、マハトマ・ガンジーやマザー・テレサなど、スピリチュアルな強い心を持った人たちが、権力ではなく人の共感の中で社会を変えていく強さに、先生は非常に感銘を受けられたのでしょうか、そういうものを科学的な取り組みと組み合わせられました。

たぶん今日お話が出てくるであろう、ポジティブ・デビエンス (Positive Deviance)、積極的逸脱や、あるいは、こちらにも少し出ておりましたエンターテインメント・エデュケーション (Entertainment education) は、私たちにとってはまだとても耳新しい概念ですが、お聞きしますと非常にずっと心に落ち、私たちが実践するときには、きつととても使いやすい概念ではないかという気がいたしました。

とはいえ、知識を学んだとしても、それを行動に変えることは、私たちは意外と不得手です。

例えば、お昼にマクドナルドに行くとしたら。本当はダイエットしたいと思いながら、ここに来たら、「やっぱりダブルチーズバーガーとポテトは食べたい。でも、ちょっと心に引け目を感じるの、ダイエット・コークにしておこうか」と。こういう反応が、私たちの心の中の反応かと思えます。

でも、私たちは問題を直視し、問題を直接解決しようとするだけではなく、私たちの心のどこかに入っている素晴らしいものに光を当てる、あるいは、それは組織やコミュニティの中にあるのかもしれませんが、そういうものに光を当てることによって、何か取り組みや、自分の変化を導き出せるのではないかと

いうことを、シングハル先生の昨日のお話の中で感じておりました。

1980年代、私が大学を終えるぐらいですが、当時、『アクエリアン革命(Aquarian Conspiracy)』という本が出ました。マリリン・ファーガソン(Marilyn Ferguson)という女性の作家が書いたものです。80年代当初めにこの本は何を言っていたのか。

ちょうどサッチャー改革があり、福祉国家体制が変化しなくてはいけない、経済成長が止まっていく時代に、社会を変えなくてはいけない、「私たちはこのままではいけない」という気持ちを持っている方が、社会の中にたくさんいらっしゃった。でも、その方々は、協議をして、連帯を結んで何かに取り組もうということではなく、一人一人の心の中にそういう気持ちを持っていた。彼女はコンスピラシーと言っていますから、日本語訳では企て、陰謀ですが、新しく社会を変えようといういい意味の陰謀を社会に広げていくことが、80年代ぐらいに少しずつ、透明な知性を持った人たちの間に広がっていった、というようなことが書いてありました。昨日、シングハル先生とお話ししながら、この本のことを急に思い出しました。

今、その本のことを知っている方は、そんなにいらっしゃらないのかもしれませんが、21世紀のこの現代になっても、私たちが直面している問題はなかなか深刻な問題ばかりです。でも、絶望することなく、さらに私たちの社会をよくしていく、自分が所属している組織の中でいい仕事をしていく、自分自身をさらに社会の中で役に立つ、貢献できるような存在にしていく。今日はこういう思いをもち賛同される多くの方がここにおいでいただいていると思います。

これからのシングハル先生のお話の中で、そのような思いをさらに強く持っていただけたらと思います

し、先ほどの透明な陰謀、社会をよくする陰謀のようなものが、社会の中に広がっていけばいいのではないかと期待しております。

個人的な話も含めまして、少々長くごあいさつさせていただきましたが、これからシングハル先生のご講演をどうぞお楽しみください。どうもありがとうございました。

○司会 上野先生、ありがとうございました。

続きまして、熊本大学政策創造研究教育センター准教授、河村洋子より本日の講師の紹介をさせていただきます。

○河村 おはようございます。本日は、師走のお忙しい時期に、地域マネジメント政策フォーラムにお越しいただきまして、本当にありがとうございます。

僭越ながら、私からシングハル先生のご紹介をさせていただきたいと思います。その前にご紹介しておきたいのが、本日の司会を務めてくれるのが、熊本県立大学4年生の宇田倫隆さんです。実は今、私たちがエンターテイメント・エデュケーションの手法を使って、青少年の性教育のためのラジオドラマをつくっています。そのライターズチームの中で中心的に頑張ってくれている学生さんの一人です。よろしくお願ひします。通訳は最相博子さんをお願いしています。よろしくお願ひいたします。

それではシングハル先生のご紹介をさせていただきます。先生は現在、テキサス大学エルパス校のサミュエル・シャーリー・アンド・エドナ・ホルト・マーストン、コミュニケーション学寄付講座の教授(Samuel Shirley and Edna Holt Marston Endowed Professor of Communication)でいらっしゃいます。また、クリントン前大統領がアーカンソー大学に創設された、公共サービス学部の特別研究員でもい

らっしゃいます。ほかにも、国連大学や世界各国の高等教育機関の職を兼任しておられ、著書や論文も数え切れないくらい出されております。ご専門はコミュニケーション学ですが取り組んでいらっしゃるのには、保健や公衆衛生をはじめ、広く社会開発に関する研究と実践です。世界中に大きなインパクトを生んでいらっしゃる方だと思っています。

先日お話を伺ったところ、世界80カ国を旅されたことがあるそうで、それは先方から「お手伝いに来てください」というSOSを受けて行かれるものがほとんどだそうです。そう考えると、どれだけ現代社会に必要とされている方かということがお分かりいただけるかと思います。

この講演の実現に至ったのは、私が先生の著書を翻訳し、それを機会に、ぜひ日本に来ていただきたいとお願いしたことがきっかけでした。先生にはすぐにご快諾いただき、このような貴重な機会を皆さまと共有できることを、本当に嬉しく思っております。

実は私は先週から先生と同行させていただいていますが、その中で私自身も含め多くの方が感銘を受けているのを目にしました。本日は皆さんとそのような感動、思いを共有できると素晴らしいと思っております。

最後になりますが、この機会は、日本学術振興会の招へい事業の助成を受けていることを申し添えます。

それでは、シングル先生、お願いいたします。



行動と社会変化のための エンターテインメント・エデュケーション戦略

テキサス大学エルバソ校 コミュニケーション学教授
アービンド・シングハル 氏



皆さま、こんにちは。

河村先生、私自身の紹介、どうもありがとうございました。それから、上野先生、このフォーラムのご紹介、ありがとうございました。通訳の方は、私の声よりももっと素晴らしい響きで訳を付けてくださるでしょう。

スクリーンに、写真、その他の画面が出てまいりますけれども、私は、私自身を皆さまの前にこのようにさらけ出して、お話を進めていきたいと思えます。どうぞこのスクリーンのポスターをさえぎることをお許しください。

私の話の中で、一つ、二つ、あるストーリー(物語)をお話したいと思えます。なぜならば、今日の講演のタイトルの中で一番大事なのが、物語の持っている力であり、その物語が社会に与えていく影響が主題です。

ガンジーの物語から考える物語のもつ力

私は子どものころインドにおりましたが、私の祖父が自由を求める人々のさまざまな運動について、

たくさん話してくれました。その中で特に、マハトマ・ガンジーの話に大変感銘を受けた覚えがあります。おそらく、インドの何百万人というおじいちゃんたちが、やはり何百万人という孫たちに、ガンジーの話を語り継いでいることでしょう。私が深く感銘を与えたお話を一つ、短いものですが、ぜひ皆さんにご紹介したいと思います。

ガンジーは、まったく政治に関わっておりません。大統領でも、首相でも、王様でもない、そういったものはまったく無関係の立場の人でした。もちろん、軍の司令官という存在でもありませんし、優れた科学者でもありません。優れた芸術家、例えばピカソのような画家でもありません。もちろん、ハンサムで容姿がいい方でもなく、ビューティーコンテストのたぐいに優勝したわけでもありません。彼は5フィート4インチですから、170センチぐらいでしょうか。それから、今すぐ換算できませんが、110ポンド(50kg程度)の普通の体型の男性でした。このように、ガンジーは私たちがこの世で考える素晴らしいものを何も持ち合わせていなかったのですが、インドでは彼のことを「マハトマ」すなわち「Great Soul(偉大なる魂)」と呼んでいます。

では、なぜガンジーが「偉大なる魂」と呼ばれるのでしょうか。これは問い掛けてみる必要があります。これから最初のお話です。

彼は非常に有能な司法関係の弁護士のような仕事をしておりました。でも、50歳になったときからの彼は、自分自身を非常に貧しい境遇に持っていました。貧しい身なり、貧しい人が食べるものを食べる、そういう生活を送るようになりました。自分で時計を巻き食べるものも自分で育て、すべて自分でやるという本当に貧しい生活をしました。

もし皆さんがインドをしっかりと理解しようと思ったときには、一番貧しい人たちとともに貧しい人た

ちの生活をし、一番弱い人たちとともに生活をする必要があります。

もちろん彼は自動車もバイクも持っていませんでした。ほとんど歩いて移動しました。ほかの国で長距離の旅をしなくてはいけない時に、特別なチャーター便を送りましょう、特別列車を仕立てましょうという申し出がありました。彼はいつも「いえいえ、それは要りません。私はゆっくり走る汽車、それもグリーン車のような一等車でなく三等車客車でいいです」という答えでした。

ガンジーは「インドの父」「バーバー」「愛すべき父」と呼ばれた方で、旅行するときにはいつでも一番遅い汽車で、新幹線などはもちろん使いません。多くの貧しい人たちが、一番遅い汽車の三等客車にしか乗れなかったという理由で、彼もそれを使って旅をしたのです。

多くのインドの人々は、彼を本当に尊敬していたから、「バーバー、どうぞ一等車、もっと速い汽車で移動してください」といつもお願いしていました。彼はその都度「いえ、私は三等車で旅をします」と答えました。人々が「バーバー、なぜあなたは三等車にしか乗らないのですか。どうぞその理由を教えてください」と尋ねると、「ではお教えしましょう。私が三等車で移動するのは、四等車がないからです」という答えでした。

子どものころ、私は祖父からこのようなガンジーの話がたくさん聞き、またガンジーに関する本をたくさん読みました。テレビでガンジーの物語を観たり、ラジオの番組で聴きました。これらすべてが、私に本当に深い印象、感動を与えました。

では、ガンジーに関する2つのお話、これも私が特に深く感動を受けたものです。このお話も皆さんにも深い感銘をお与えするのではないかと思います。

インドは1947年に独立しました。それを機に

インドは2つの国になりました。一つはインド、もう一つがパキスタンです。インドはヒンズー教の国、パキスタンはイスラム教の国というかたちで独立し、2つの国の間には大変な緊張感が生まれました。いろいろな所で暴力沙汰や衝突が日常茶飯事のようにありました。

ガンジーはこの状況を大変悲しみました。人が人を殺す、それもたくさんの人がたくさんの人を殺すという状況です。ガンジーは多くの人を殺されるような現場に必ず出掛けました。武器も持たず防御の手段も身に付けずに、一人でそこへ出掛けていきました。

ガンジーがある日砂漠を歩いていたとき、ある男がガンジーの所にやってきて、「父よ、私は地獄に落ちます。なぜなら私は悪いことをたくさんしてきたからです」と語りかけました。ガンジーはその男にどんな悪いことをしたのかと聞きました。その男は「私はこの手で赤子を殺してしまいました」と答えました。そして彼は泣き出し、泣き崩れ、何度も「私は今から地獄に落ちるのです。なぜなら、小さな赤子を私のこの手で殺してしまったのだから」と言いました。ガンジーは「なぜそのようなことをしたのですか」と尋ねました。「彼らが私の赤ちゃんを殺したのです。私は彼らの赤ちゃんを殺したのです。イスラムの人たちがヒンズー教徒である私たちの赤ちゃんを殺したのです。だから、その復讐、報復として、彼らの赤ちゃんを殺さなければならなかった。しかも私の手で。でもそれは私にとって大変つらいことでした。私は本当に悪いことをしてしまったので、私には救いはない。だから地獄へ落ちます」と答えました。ガンジーは男の肩を抱き「私の息子よ」と引き寄せて、「救いはある。あなたが地獄に落ちないように、何かできることがあるのだ」と彼に話し掛けました。

ガンジーは「私自身はあなたを救うことはできま

せん。私の言うことをよく聞きなさい。私はあなたに父親も母親も殺されて孤児になってしまった赤ちゃんを探し出してほしい。そしてその子をお自分の子どもとして迎えてください。ただ、その時に二つ覚えておかなければいけないことがあります。一つは、あなたはヒンズー教徒ですね。あなたが自分の子どもとして育て

る両親がいない孤児の赤ちゃんはイスラム教徒の子でなければいけません。二つ目はもっと大切なことです。この赤ちゃんを育てていくときにイスラム教徒として育ててください。こうすることであなたには救いが来る可能性があるのです」と、言いました。

今の二つのお話から、お話にはパワーがあることがお分かりになったかと思います。物語は何か行き詰まったものを変えて、先に進む可能性をつくり出すことがお分かりになったかと思います。今のようなケースだけでなく、私たちの社会の中でもいろいろな問題にぶつかり、行き詰まってどうしていいか分からなくなります。その時にこのエンターテインメント、こういったいろいろなお話を聞いたりみたりすることで、私たちはその解決方法をそこから学んでいくことができます。それがエンターテインメント・エデュケーションの根幹です。私たちは、本当に行き詰まったときにその行き詰まりを解きほぐしてくれる、あるいはいろいろな可能性を生み出してくれるものとして、エンターテインメント・エデュケーションを考えます。

エンターテインメント・エデュケーションは可能性を生み出していくのですが、これからこれに関して二つのことをお話したいと思います。



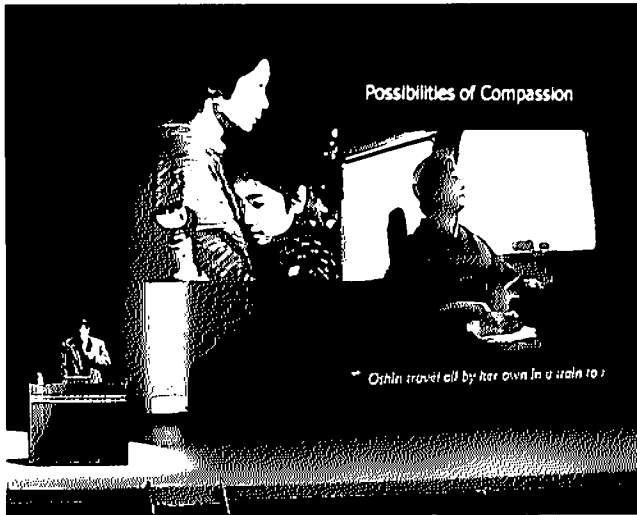
ペルーの「シンプレメンテ・マリア」

最初は、私たちがエンターテインメント・エデュケーションをどのように用いてきたかについてのお話です。それは社会を大きく変えてきました。今から二つの例をお話します。

その一つは、南米ペルーで起きたことです。1970年代を考えてください。今、皆さんにお見せしているのは、ある結婚式の写真(右上)です。マリアとマリアの先生であるエステバンという男性との結婚式です。実はこの結婚式は、ペルーの首都のリマ全体の人々を興奮の渦に巻き込みました。

これはリマ市で最大の結婚式でした。これには招かれてはいなかったのですが、最高級の洋服に身を包みプレゼントを持った約1万人の人々が、結婚式が行われる教会の外に集まってきました。人々は結婚式に持っていく花を買ったので、リマ市内の花屋では花が売り切れてしまうほどでした。この結婚式はリマの人々にとって長いこと待ち望んでいたことでした。

この結婚式には不思議な点の一つがありました。実はこれは本物の結婚式でなく、テレビドラマに登場する人物のドラマの中での架空の結婚式だったので



す。1万人の人々が最高のドレスを着て、プレゼントや花束を抱えて、2人の登場人物の結婚式の場面の教会にやってきたのです。ペルー最大有力新聞社の記者が取材し、翌日の新聞の第一面にここで今お見せした写真とともに結婚式の記事を載せました。

このようなことは研究者やメディア関係の人たちにとって、大変不思議な現象でした。たくさんの人が実際の結婚式でなくドラマ上の結婚式に、本当に結婚式に参列するような服装をして現れた。どうしてこんなことが起きたのか大きな疑問でした。

この現象を理解するため、たくさんの研究が行われました。これは「シンプレメンテ・マリア」というタイトルのテレビドラマでした。私はこのドラマの放送が終わって25年たってからペルーに行き、これまでなされてきたことを掘り起こし、いろいろな人と話をし、私自身の研究を進めました。

私がこれから申し上げることを理解するためには、皆さんに「シンプレメンテ・マリア」のお話について理解していただかなければなりません。これはペルーで1969年から1971年の2年間にわたってテレビで放送されたソープオペラで、日本で言うところの昼ドラ（昼のメロドラマ）と同じようなものです。

これはマリアという若く美しい、アンデス山地の田舎に育った女性が、リマという大都市に仕事探しのためにやってきたというお話です。貧しく若く美

しい女性がさまざまな問題に直面し、自分で運命を切り開いていく、いわばシンデレラストーリーです。皆さん、「おしん」という日本のドラマを覚えていらっしゃいますか。「シンプレメンテ・マリア」はペルー版「おしん」の物語です。おしんもそうですが、マリアはさまざまな困難に直面してそれを乗り越えていきます。そのとき彼女は自身

の尊厳を守り抜き、彼女は自分をいじめた人たちに対する思いやりももっていました。

「おしん」が及ぼした影響はタイで放送されたときにも大変大きなものでした。NHKがペルーに輸出し、ペルーで放送されたときにも大きな反響がありました。おしんが非常に空腹でほんの少しあった食べ物を祖母に差し出したエピソードが放送されたとき、放送終了後バンコクのテレビ局にはたくさんの視聴者が食べ物を持ってやってきました。おしんが体調を崩して病気になるシーンの中には、終了後ペルーの人たちは薬を持ってテレビ局へ駆けつけました。

「おしん」を見るとき、ペルーの人たちは、もちろんテレビの前に座っています。しかし、おしんが大変過酷な状況に置かれたときには、テレビ画面の中のおしんに向かって「大丈夫、助けてあげる」「なんとかなる」と実在する人物がそこにいるかのように話し掛けていました。

こういったテレビドラマでは、最近のものでは「冬のソナタ」がありますでしょうか。たぶん皆さんはリビングルームで、テレビ画面にきぎ付けになったと思います。それは毎日、あるいは週1回のドラマかもしれません。あるいは予告された、決まったときに放送されるかもしれませんが、そのときにはテレビの中の人物とリビングルームにいる皆さんとの間には距離がまったくなくなります。

また、野球の試合を見ていて、たとえばイチローや他の皆さんの好きな野球選手がスクリーンに映り、ホームランを打ちます。そうすると皆さんはテレビに向かって、その選手がまるでそこで聞いているかのように語りかけますよね。それと同じことです。

「シンプレメンテ・マリア」の中でマリアは家政婦として大都会リマの街で一生懸命働きます。そして雇い主に成人識字教室に行きたいとお願ひし、夜は自由な時間をもらってそこに通います。このマリアの行動の影響でリマに住む多くの若い家政婦の女性が、実際に成人識字教室に通い始めました。ペルーの教育省が田舎から街に家政婦として働きにきた若い女性たちが成人識字の教室に通い始める現象に気づき、より多くの若い人たちが成人識字教室に通えるように、さまざまな方策をうち出しました。

マリアは夜には成人識字教室に行き帰ってきて宿題をし、その後ミシンを使って裁縫をします。それは余分なお金を稼ぐための手段でした。テレビの中でマリアが夜中に洋服を縫って、それを収入にしているのを見た若い女性たちは、マリアと同じように洋服を縫いたいと思い、裁縫教室に通い始めました。

この現象に教育省の職業訓練関連部署の人が気づき、数百の学校を建てることに着手しました。その学校では裁縫だけでなく刺しゅうなど、テレビの中でマリアが行ったことすべてを女性たちが学べるように学校建設に乗り出しました。

テレビドラマの中でマリアはミシンを使って裁縫したのですが、その時のミシンがシンガーミシンです。

番組の影響でシンガーミシンの売り上げは急激に増加しました。シンガーミシンは「シンプレメンテ・マリア」のスポンサーになりました。本当に驚くべき社会的な現象です。

つまりテレビドラマの影響で人々が裁縫教室に通うようになったり、読み書きを習う教室に通うよう

になったり、あるいはドラマの中で使われたミシンと同じ種類のもの販売数が急激に伸びたのです。非常に驚くべき現象を起こしたのです。

リマのいたるところで「シンプレメンテ・マリア」のストーリーの大きな影響を目にするようになりました。マリアはとても愛された主役のキャラクターでした。

これらの社会的な現象を研究しますと、このドラマのお話が新しい可能性をいくつも生み出していることに気がきます。それは若い女性たちが裁縫教室に通い出す可能性、ある特定のミシンが売れるようになる可能性、人々が何かを勉強するためにいろいろな教室に通う、職業訓練を受けるようになる可能性、そんな可能性をたくさん生み出していたわけです。

ペルーでこのドラマが放送されたとき、もう一つ、大変重要なことが起きています。それをお話ししましょう。

社会学者などさまざまな専門家たちがペルーで「シンプレメンテ・マリア」が起こした社会現象についていろいろと調べました。彼らはペルー中の家政婦さんが「シンプレメンテ・マリア」の放送を、雇ってもらっている家族と一緒に床に座ってテレビを観ている現象に気がきました。

雇い主の家族と家政婦が同じ部屋で一つのテレビを観るといのは、このドラマが起こした現象であると言えます。さまざまな調査研究によると、放送中と放送終了後に都市に住んでいる富裕層の人たちの家政婦との関係は非常に改善されたという傾向が見えたのです。

それでは、なぜ先ほどの結婚式があんなにも大フィーバーだったのか、皆さんはお知りになりたいでしょう。いかがですか。では、結婚式についてお話ししましょう。

最初のエピソードです。まず、マリアがアンデス

の山地からリマに到着しました。そこに若いハンサムな男性が現れマリアの美しさに感動し、ダンスに行こうと誘います。この男性は都会に住んでいるシティボーイで、マリアを誘惑していくわけです。マリアがアンデスの田舎から出てきたことが分かっていますから、街を案内しようといろいろな所へ連れていきます。フランスへ行ったりもします。このエピソードの終わりにマリアは妊娠しました。マリアを妊娠させたことを知った青年は、彼女の許を離れました。この青年は結婚せずにマリアを妊娠させてしまった悪いシティボーイだったのです。

この妊娠騒ぎからマリアはたくさんの問題に直面します。というのは、ペルーはカトリックの国ですから、婚前交渉は許されません。娘の父は激怒しマリアを放り出してしまいます。「おまえは自分の仕事を忠実にしないで遊びほうけていて、こういうことになってしまった」と解雇するのです。でもマリアは落胆せず次の仕事を見つけ、よい家政婦として働くことができるよう、自分をより向上させるという態度を常に忘れず、新しい境遇に向かって力強く生きていきます。苦い経験以降、マリアは都会の特にハンサムで言葉巧みに誘ってくる青年たちから遠ざかるようにしました。もう一度とこういう経験をしたくないという強い意志からです。

そうこうするうち、ある一人の男性がマリアを好きになりました。彼は大変思いやりが深く、ハンサムで勤勉でした。マリアに対してとても深い思いやりの気持ちをもっていました。その男性はマリアの識字教室の先生でした。

このドラマを観ている気持ちになってみてください。マリアが識字教室に通い始めました。そこにエステバンという素晴らしい先生がいました。マリアはその男性にだんだん引かれていきます。エステバン先生もマリアはとても勤勉で一生懸命のいい生徒、

心の優しい女性ですから、だんだん彼女に引かれていきます。ここには素晴らしいロマンスが生まれるという気がしますね。そして確かに生まれます。

マリアは友人に「エステバンはとてもいい人で素晴らしい先生だ」と彼について語ります。一方、エステバンも友人に「マリアはとても素晴らしい。勤勉で心の優しい女性だ」と話します。でも、お互いに自分の感情を表現し合うことができません。

視聴者は、その両方が深い思いを持っていることを知りテレビを観ているわけですから、これはきっとどうにかになっていくよ、ロマンスが生まれるよという期待をもって観ています。ドラマの男性視聴者はテレビに向かって「先生、ここで男になれば、彼女をデートに誘え」と画面の中のエステバンを励ますのです。一方、若い女性視聴者はテレビの中のマリアに向かって「マリア、このエステバン先生は、あのいやしいシティボーイとは違って素晴らしい男性だよ。彼と一緒に掛けるのよ」と、マリアの背中を押そうと語りかけます。

しばらく時間がたってから別のシーンで、エステバンが「私が結婚できるのはたった一人の女性だ。この女性以外には、私はたぶん誰とも結婚はできない」と友人に語ります。ところが、エステバンは大変恥ずかしがり屋で、マリアには悪いシティボーイとの間にできた息子がいるので、思いを伝えると何もかもがぶち壊れてしまうのではないかと非常に躊躇しているわけです。だからテレビを見ている男性は「男になれば」と声援を一生懸命送るのです。このように、ドラマが展開していきます。

日が経つにつれ、マリアの裁縫の腕はめきめき上達します。人気は上がり大きなビジネスを展開し始めます。一人で縫うのでは間に合わなくなって、お針子さんを雇うようになります。そしてマリアはリマで大変有名なファッションデザイナーになっていきます。

エステバンはマリアがどんどん成功していても、まだ彼女に何も言えないままです。彼はマリアのビジネス・マネジャーとして、彼女と一緒に仕事をすることにはなりません。

ある日、エステバンのお母さんは「息子よ、もう私も年を取ってそんなに長く生きられないと思う。私の願いは孫をひざの上に抱くことだよ」と伝えます。このころエステバンは40歳ぐらいでしょうか。

このテレビドラマは通常月曜から金曜の午後8時から9時という時間帯で放送されましたが、ある金曜日エステバンは咳払いをし「結婚してくれますか」とマリアに問い掛けました。そこでその日のエピソードが終わります。

これがドラマの手法ですね。「結婚してくれますか」そこで終わるわけです。金曜日です。もうほとんど終わりの午後9時近く、ドラマの最後の頃に、エステバンがプロポーズします。土曜日・日曜日はドラマがありませんから、また月曜日の夜までマリアはどういう返事をしたのだろうか、視聴者は待っていないといけません。週末は街中、いろいろな所で、マリアがどういふふうに答えるだろうかときざまざまな会話がされるわけです。例えば「エステバンはマリアに聞いたよね、最後に、結婚してくれるか」って聞いたよね。マリアはなんて答えるかしら」「ビジネスも成功してるし、息子も大きくなってると、遅すぎたかも」という感じで人々は話します。人の会話だけではなくテレビのトークショーや新聞でも「マリアはイエスと言うか否か」という話題が取り上げられました。

月曜日の午後8時になりました。すべての人がテレビの前に座って、マリアの答えを待っています。マリアの口から出てきた言葉は「Si, maestro.」「はい、先生、私はあなたと結婚します」という答えでした。

ドラマの中で結婚式がいつか発表されました。視

聴者は何らかの手段で、どこで結婚式のシーンが撮られるのかの情報を入手しました。その結果、1万人が素晴らしいドレスを着て、この結婚式にやってくるわけです。

この写真(右下)を見てください。マリアはとても美しいですね。マエストロは少し年を取ってきて、髪の毛が白髪交じりのまだらになっています。

結婚式の撮影が始まりました。新聞記者が取材した光景が新聞の第1面に載ります。そこに書かれている記事の内容は式が行われ、花嫁が「Yes, I do.」という答えを出す場面——花嫁と花婿それぞれが神父さまの問い掛けに対し、Yes, I doと答える場面——で高



齡の女性たちが十数人、興奮のあまり気を失ってしまったというものでした。

ドラマの効果の理論的な背景と パートナーシップ

こういったお話を継続的に観ていくことで視聴者たちはその話の中で語られる話の道筋、そこに現れてくるいろいろな人格、人々、そしてその人たちがしていることなどを自分の人生や生活と照らし合わせていくようになります。

理論的に申し上げますと、これはモデリングという力です。「シンプレメンテ・マリア」の中で田舎から出てきた少女がいろいろな困難に向かいながら徐々に成功の階段を上がっていく物語は、私たちに大きな夢を与えてくれます。

もちろん、そのお話はよく書かれたものでないといけません。だから、お話を書く人たちはいろいろなリサーチをした上でよく考えてお話を組み立てているのです。

ここにいらっしゃる河村先生は現在、学生や協力者の方々とともに、あるラジオドラマの制作に関わっていらっしゃいます。いろいろな人々をドラマの中の人々がしていることに巻き込み、聴取者がドラマを聴いて影響を受けたがゆえに、自分が今までしたことがないことに着手していく。そういったドラマをこの熊本で制作中です。

河村先生と学生他、協力者の方々でされているプロジェクトは私が知る限りでは、日本では初めてのケースです。物語の力を最大限に生かしていくのですが、そのためにはリサーチや関係各所とのパートナーシップ、協力者も必要です。そして実際にそれを放送する、エフエム熊本といった地方メディアの協

力が必要です。そのドラマを聴くことで、若い人たちが大きな感銘を受けて前に進んでいく。

私は熊本でこの物語がどのように展開していくのか、大変興味を持って見守っていきたいと思います。素晴らしいプロットでの物語の展開だと聞いております。もちろん、その話は若い人々のお話です。若い人々が実際に日常生活の中で直面する問題を取り上げ、それを解決していく過程がドラマの中で語られるはずです。

エンターテインメント・エデュケーションのデザイン 南アフリカにおける家庭内暴力を取り上げたプログラムを事例に

それでは、このエンターテインメント・エデュケーションの方策を、どのようにしてデザインしていくのか、育てていくのかについて、南アフリカの別の物語を例に簡単にご説明しようと思います。ここまでお話して、皆さんにかなり理解いただけたらと思います。

1998年、私は南アフリカ共和国から招へいを受けその後2年間この国とアメリカを往来することになりました。エンターテインメント・エデュケーションプログラムをつくることが目的でした。取り上げた問題は家庭内暴力という大変難しいものでした。

家庭内暴力、ドメスティック・バイオレンス(DV)は、大変複雑な社会問題です。問題が複雑になった時、私たちは行き詰まってしまうますがエンターテインメント・エデュケーションは可能性をもたらすことを皆さんは覚えていらっしゃいますね。なぜ家庭内暴力が非常に難しい社会問題なのか。その難しい問題に対してエンターテインメント・エデュケーションはどのようにして可能性を示したのかについてお

話しましょう。家庭内暴力とはいったいどのようなものなのかちょっと考えてみます。

それは個々人の健康の問題にとどまりません。例えば、家族の中で女性、子ども、あるいは高齢者が虐待を受けると、その家族の中の調和が乱れます。虐待を受けた人物が身体的な影響もいろいろ受けますが、それだけでなく、心理的に、精神的に影響を受けるでしょう。それは虐待を受けている本人だけでなく、家族全体に行き渡ります。この問題の中で最も深刻で最悪なことは、虐待が行われる場所が家庭内であることです。一番安全で、一番守られているべき場所で、虐待や暴力行為が起きることが大きな問題です。

家庭内暴力の状況は暴力だけでなく、言葉による暴力(リップ・バイオレンス)もあります。それから身体的なもの、精神的、心理的なもの、そういった虐待もあります。男性と女性の間だけに起こるのではなく、母親と子どものような関係、家族の中の成人と高齢者のような成人同士の間にもあり得ます。

これをエンターテイメント・エデュケーションの中に取り入れるときにはまずリサーチから始めます。すべてを理解して取りかかっているかといけません。なぜ、どのようにして、誰が、というすべてのことも含めて、実際に理解をしていくことが非常に難しいのですが、それなしにはエンターテイメント・エデュケーションプログラムのコンセプト、根幹となるものを築いていけません。

リサーチで私たちが発見したのは、非常に典型的な3つのパターンでした。そこで発せられる言葉、そういうことが起きる状況のあらず、非常に支配的な立場という状況の中で、南アフリカの場合には特に、男性と女性の間で起きるケースが多いことが明らかになりました。

どのようなことになるか具体的な状況を見てみましょう。まず男性が家に帰ってきます。ドアを閉め

カーテンを閉めます。そういう状況の中で、ほんのささいなことがきっかけになります。例えば帰ってきたときに、妻が家の中になかった。あるいは、出された食べ物が冷たかった。食べ物の塩気が少し足りなかった。そういったささいなことで、男性が簡単に暴力的に豹変するケースがあることが分かりました。

男性は家に帰ってくると、自分が家長であることをしっかり感じているので、妻が「なぜ怒っているの」と聞いたことだけで、妻がまったく自分を尊敬していない、自分に対して軽蔑的なことを言ったと受け取ってしまうのです。その結果、言語での暴力や身体的な暴力も振るうのです。ですから、その男性は私をこれをちゃんと制御しなければいけない、私の手で変えていかなければいけない、妻は私を尊敬しなければいけない、自らがそういう立場にあるべきだと思われるのです。

次に女性の立場に目を向けてみましょう。

女性はまったく何もできない、どうにもできないという無力感に打ちひしがれます。家の中にながら大変不安な状態です。当然、夫が暴力的になろうとするのを避けるようにします。夫が何か行動を起こすと、そこから逃れるようにします。でも、そのような彼女の態度がますます夫を怒らせてしまうのですから、彼女は助けを呼びたくてもそれができず、さらに夫を怒らせてしまいます。

家庭内暴力の状況に置かれている女性たちは、南アフリカに限ったものではありません。ほかの地域でも、とにかく家庭内暴力に遭っている女性たちは、なぜ助けを呼ぶことができないのでしょうか。

男性は自分が家長、中心となるべきだと言われながらずっと育ってきています。そして女性は、母親や祖母から家庭の主婦が家の中の調和を保っていかなければいけないとずっと教えられてきているのです。さらにそれを子どもたちにも伝えていくのです。

男性が怒りに任せて自分自身を制御できない状態になった時、女性はとにかく調和をとろうとしてヘルプレス、何もできない状態になります。子どもたちはその状況を見ながら育っていくので、それが次の世代へと引き継がれていきます。

南アフリカの物語の中には別の登場人物がいます。友人と隣人です。例えば黒人の場合、家屋はとても小さくて、狭い土地にひしめいたような状況で生活しているのです。隣の家で何が起きているのか実は手に取るように分かるのです。隣で家庭内暴力が起きているとき、何か物が投げられて音がするし、叫び声も聞こえます。あるいは外で買い物をしているときに女性に会うと、女性の目の周りが真っ黒になっていたりするのを見て、隣の家で何が起きているかはすぐに分かってしまうのです。

では、隣家で家庭内暴力が起きているときに、それに気づいた隣人は介入して止めるのでしょうか。皆さん、どう思いますか。

彼らは介入したり止めたりは一切しません。なぜならば、夫婦間で起きている出来事はプライベートなこと、他人が入り込むべきではないと考えるからです。

このお話は本当に行き詰まった出口のないお話です。自分自身を制御できない夫が奥さんを打ちのめします。奥さんは助けを呼びたくても呼ぶことすらできない。隣人はその状況を知りながら、彼らのプライベートなことに踏み込むのはよくないと思い何もできない、何もしない。こういう行き詰まった状況です。

こういった行き詰まった話をどのように解きほぐしていきましょうか。事態が硬直してまったく変わらないときに、どのようにして変わっていく可能性を生み出していけばいいのでしょうか。南アフリカではどのようにしたのでしょうか。どのようにして、これまでにない新しい可能性をつくり出したのでしょうか。

いくつかのエピソードによるテレビドラマを制作し数カ月にわたって放送していくわけです。

最初に見ていて目を覆うようなものでなく、楽しめるような状況をつくり出します。人から尊敬されているけれどもとても短気で、何かぶちんと切れたときにはどうしようもなくなって妻に当たるというある夫、助けを呼びたいけれども何もすることができないという奥さんの状況、聞こえてくるいろいろな音やいろいろな状況から、手を出したいけれども出せない隣の友達。こういう登場人物による物語を展開させます。

夫の暴力、虐待がどんどんエスカレートする。当然、妻の「誰か助けて」という思いもエスカレートしていく。同時に、友人の「なんとか助けてあげたい」という思いもエスカレートする。そのようにドラマを運んでいきます。

そしてある日怒り狂った夫に対して、妻の目線が無力感にあふれ、冷たくなったとき、この夫の怒りは頂点に達し、妻を打ちのめそうとします。そのときに何かが起こります。

このとき隣の友人が家の中にじっとしていないで外に出てきました。たった1軒の隣の人ではなく、周囲の複数の隣人たちが家から出てきます。その時に、鍋や釜、そういう台所にある音が出る物を持って出てきます。

今家の中で、まさに夫が妻を打ちのめそうとしたときに、家の外に立った隣人たちは持って出てきた鍋や釜をバンバンと打ち鳴らし始めます。鍋や釜はだいたいどこの家にもありますが、それを持ち出してくるのです。すごい音になりますね。それが、一人の人でなく、十何人も隣人みんなが出てくればかなりの音になります。

そこで何が起きるでしょう。周りで大きな音がします。家の中にいる夫は、まだ自分のプライベートな

空間にいると言えるのでしょうか。それとも、家の中でありながら公的空間になっているのでしょうか。妻の立場になってください。バンバンと音がした。やっぱり何の助けもないという思いにとらわれているのでしょうか。たくさんの音がすることで、周りの人が彼女のことを思っていることに気付くでしょう。

外に出てきた隣人たちはどうでしょうか。まだ何もできないと思っているのでしょうか。そうではなく、みんなと一緒になれば、新しい可能性を生み出せると思っているのではないのでしょうか。

こういった行動は、実は南アフリカの社会ではそれまで起きたことはありません。現実にはこういったことは起きていなかったから、話をつくっていくわけです。ペンはいかにようにでもその話を展開させることができる。古い物語の中から新しい可能性を持たせるように、ペンの力でそれを書いていくことができるのです。

この放送が終了した翌日、南アフリカのいろいろな街や村で、たくさんの男性、女性が、虐待が行われている家の周りに鍋や釜を持ちよってバンバンと音を鳴らしている。ドラマの中でのシーンを実際の現象として目にするようになります。彼らはどこでこのようなことを学んだのでしょうか。

別の展開も生まれました。例えば、学校で生徒が先生から叱られます。先生が何か体罰を加えようとしたとき、ほかの生徒たちが机の底をボンボンとたたいて音を立てるようになったのです。こういった、彼らが今までまったく知らなかった新しい行動をどこから学んだのでしょうか。

結語：物語のもつ大きな力

物語は大きな力を秘めています。その力は現実の物事と関連するもので、今までなかった新しい可能

性をつくり出していき、そして人と社会をいい方向に導く力です。

皆さんに私の好きなイギリスの作家である G. K. チェスタートン (G.K.Chesterton) という方の言葉を引用させていただきます。それで私の話を終わりたいと思います。

物語、おとぎ話の持つ力は、私たちを新たな可能性へと導いてくれるということを、G. K. チェスタートンが次のように表現しています。「おとぎ話は、真実以上のものです。なぜならそれは、ドラゴン(社会的な問題や課題)が実際に存在するというのを伝えるだけでなく、ドラゴンを打ち負かすことが可能だということも教えてくれるからです」と。ありがとうございました。

○司会 それではこれをもちまして、平成23年度熊本大学政策創造研究教育センター地域マネジメント政策フォーラムを閉会いたします。

それでは最後に、もう一度、シングハル先生に盛大な拍手をお願いいたします。

(終了)



ラジオドラマプロジェクトに参加している学生たちと共に

政創研

平成23年度 地域マネジメント
政策フォーラム 第2弾

2011 12月13日(火)

10:00 - 12:00 (9:30開場)

会場 くまもと森都心プラザ プラザホール

演題 「行動と社会変化のための
エンターテインメント・エデュケーション戦略」
"Entertainment-education strategies for social and behavioral change:
Power and Possibilities"



逐次通訳

講演者
アービンド・シングハル 氏
(Arvind Singhal, PhD)
テキサス大学エルバソ校 コミュニケーション学教授

サミュエル・シャーリー&エドナ・ホルトマーストンコミュニケーション学寄付講座教授、
テキサス大学エルバソ校コミュニケーション学科ソーシャル・ジャスティス・イニシアティブ
プログラムディレクター
(Samuel Shirley and Edna Holt Marston Endowed Professor of Communication, and Director of
the Social Justice Initiative in UTEP's Department of Communication)

profile

専門は、コミュニケーション学。研究と実践の分野は、健康、教育、平和、人権、貧困緩和、
持続可能な発展、市民参加、民主主義とガバナンス、協働的市民活動と多岐に及ぶ。世界中
を飛び回り、エンターテインメント・エデュケーション戦略をはじめとして、コミュニケーション
手法の研究と実践に取り組み、著書や論文で多くの賞を受賞している。

**入場
無料**

エンターテインメントと教育の融合

人と 社

会

はこれぞ

動く

くまもと
森都心プラザ
プラザホール5F
(熊本駅前です)



【主催】熊本大学政策創造研究教育センター
【後援】高等教育コンソーシアム熊本、熊本日日新聞社、
RKK、TKU、KKT、KAB、FMK

お問合せ

熊本大学政策創造研究教育センター

tel: 096-342-2044

mail: seisoken@gpo.kumamoto-u.ac.jp

詳しくはホームページをご覧ください

<http://www.cps.kumamoto-u.ac.jp/>

Kumamoto University

このフォーラムでは、エンターテインメントと教育を融合させ、人と社会を動かしてきた「エンターテインメント・エデュケーション」について、世界中でその研究と実践に取り組み牽引するアービンド・シングハル先生に、その魅力、パワー、可能性をご紹介します。コミュニケーションを通して人の心を動かしたり、よりよい社会の実現に取り組まれている専門家から広く一般の方々までとても素敵なアイデアを得ることができるまたとない機会です。まずは「エンターテインメント・エデュケーションって何?」という疑問を解消しに、お気軽にご参加ください。